



# 飲酒文化の変容とポーランド社会 ～ウオッカからビールへ

いしかわ あきひろ  
石川 晃弘

中央大学名誉教授・中欧研究者

1972年夏、私は勤務先の中央大学の学生数人とともに、ポーランド語集中コースに出るためにウーチという都市にいた。ある日、授業の後に学生たちと街をぶらついていたら、路傍でウオッカを立ち飲みしている労働者風の2人の男に話しかけられ、彼らの勧めでその立ち飲みを付き合わされる羽目になった。それからそのうちの一人に彼のアパートに連れて行かれ、夕食を出され、またウオッカを飲まされた。ウーチの駅前の正面には、「アルコール追放！」と書かれた大きな垂れ幕が掛けられていたが、ポーランド人はそんなことなど気に掛けず、ウオッカをよく飲んでいて、街のキオスクでも買えた。ポーランド人の友人から貰う土産も、ウオッカだった。それが社会主義時代のポーランドの風景であった。

それから40年経った今、私はウーチからそう遠くない都市、人口20万人弱のトルンにいる。ここに来て驚いたことには、路傍でも酒場でもウオッカを飲むポーランド人が見かけなくなった。路傍での立ち飲みは去年から禁止になり、レストランや酒場の中で客が飲んでいるのはもっぱらビールである。行きつけのパブでも客が飲んでいるのがビールばかりだったので、ウエイトレスのおばさんに、ウオッカを飲む客はいないのか、と尋ねたら、ウオッカを注文するのはあなたぐらいだ、と言われてしまった。

1970年代にはビールといえば店で売っていたの

はせいぜい3種類かそこらで、味もけっしていいものではなかった。しかし、体制が変わって市場経済に移行した今日では、多種多様なビールが回っている。トルンの中心広場にあるピアホールでは、ポーランド産のビールだけでも77種類がメニューに載っている。味もよくなった。私の行きつけのスーパーでは国産だけでなく、輸入ビールも並んでいる。しかし、そこではウオッカは一瓶も置かれていない。ウオッカを飲むのは、結婚披露宴の際など、限られた時だけになってしまったようだ。

何人かのポーランド人に、なぜウオッカを飲まなくなったのかと尋ねてみた。ウオッカは高価だ、俺たちには金がない、という答えが、まず返ってきた。たしかに一般のパブなどでビール中瓶を1本注文すると日本円換算で120円くらいで、ウオッカだと1ショットでそれをちょっと上回るくらいの値段である。ウオッカは1ショットを一気に飲めばそれで終わりだが、ビールなら中瓶1本で40～50分くらいは仲間同士の歓談の間が持つ。低い所得で楽しい時間をより長く持つためには、ビールのほうが効果的だ、ということらしい。

また、かつては性別に分かれていた社交圏が今では男女間で共通となり、一緒に同席し一緒に歓談する傾向が広がり、女性も飲酒仲間に参入してきたので、ビールが一般に飲まれるようになった、ということも理由のひとつのようだ。



ウオッカからビールへの飲酒行動の変化は、社会における格差拡大と低所得者の広がり、酔うことより歓談を楽しむことへの嗜好の移行、そして社交生活におけるジェンダーの壁の消失という、体制転換後ポーランドの社会と文化の変動傾向をよく反映しているとみられる。しかし、飲む酒の種類がこのように推移しても、変わらないのはポーランド人のくったくのない陽気さとソフトな人間的絆である。

ポーランドのパブの店内にはどこでも、「アルコールは健康を害する」と書かれた小さな看板が掲げられている。国の決まりでパブはこれを掲げなければならないことになっているようだ。しかし、パブの中では、老若男女が陽気にビールを飲んでいる。ビールはアルコールとはみなされていないかのようだ。平日の午後遅くなど、住宅街の一角にある小さなパブに寄ってみると、もう地元の常連客たちが集まって他愛ない世間話をしながらビールを飲んでいる光景に出くわす。犬の散歩のついでに立ち寄る客もいる。買い物帰りに知り合いの飲み仲間を見かけて入ってくる者もいる。私のようなよそ者でも、すぐにその輪の中に加えてくれる。日曜の午後や夕方でも、なにか人気のあるスポーツ競技のテレビ中継があると、地元の人たちが集まって観戦できるように、パブは扉を開けている。

そのようなパブで常連客の誰かの顔が見えない

と、「あいつは今日、どうしたんだ」と誰かが言いだす。すると別な誰かが「彼は今、風邪を引いて寝込んでいる」という情報を提供する。あるいは直接本人に電話して、様子を確かめる。ときには直接その人の家に行って、元気で暇そうだったら飲みを誘い出す。

こうして住宅街のパブは近隣関係の情報が共有され、社会関係が再生産される場にもなっている。パブに出入りしない人でも、常連客の誰かが何らかの関係で顔見知りになっている。人びとはそれぞれ地域の中で孤立した存在ではない。このような環境の中では孤独死などもありえないだろう。

その一方で人と人との関係はあっさりしきっぱりしているから、地域での人間関係は心理的重圧を伴わない。実際、人びとはマイペースであっさりした関係の中に身を置いて生活しており、近隣社会への同調を強要されない。その意味で、住宅街のパブは近隣社会の維持と再生産の円滑な機能を担っている。

パブがこのような機能を果たしていくためには、客は泥酔して飲みつぶれたり、攻撃的になったりしてはならない。パブは近隣の仲間と楽しく陽気に暇を過ごす場でなければならないのだ。それにはやはりウオッカよりもビールのほうが適している。